

# ゼロの焦点

2005(平成17)年12月25日鑑賞(シネ・ヌーヴォ)



監督＝野村芳太郎／原作＝松本清張／出演＝久我美子／高千穂ひづる／有馬稲子／南原宏治  
／西村晃／加藤嘉（松竹配給／1961年日本映画／95分）

特  
集

日本映画界の至宝、  
安らかに

……『張込み』に続く松本清張モノ第2弾だが、こちらの方が有名。北陸の暗い海と自殺の名所を舞台として展開されるサスペンスは、いまだに色あせない面白さが……。新婚1週間で失踪した夫の行方とその秘密の謎を解いていく新妻を久我美子が熱演。高千穂ひづる、有馬稲子とのバトルも超見モノ。今どきの若者もこういう昔の美人女優をちゃんと鑑賞しなければ……。

## 『張込み』に続く第2弾は、推理小説の最高峰！

野村芳太郎監督が松本清張原作モノの第2弾としたのは、最高傑作の推理小説といわれている『ゼロの焦点』。北陸の金沢・能登を舞台とし、新婚1週間で失踪した夫鵜原憲一（南原宏治）をめぐる展開される物語は、ドラマ性や意外性において傑出したもの。「現地妻」の田沼久子（有馬稲子）が存在することは、新たに鵜原禎子（久我美子）と結婚して東京本社に栄転していこうとする憲一の邪魔になることは明らか。そんな状況下、憲一が下した決断とは……？

他方、今は室田儀作社長（加藤嘉）の妻におさまり、上流階級のマダムになりきっている佐知子（高千穂ひづる）にも意外な過去が……。 「パンパン」という言葉自体が、今では死語になっているかもしれないが、その言葉や米軍基地のある立川という地名を理解することは、この映画を理解するための大前提……。1950年代というあの時代、流暢な英語をしゃべる女とは、一体どんな人種だったのか……。 それらの時代背景の勉強を含めて、スリルとサスペンスに富んだ松本清張推理小説の醍醐味をこの映画で堪能しよう。

## 舞台は金沢と能登

この映画の主要な舞台は、金沢と能登。とりわけ印象深いのは、「自殺の名所」である能登金剛の美しい(?)絶壁。この絶壁は『鬼畜』(78年)でも使われているが、この絶壁の上でくり広げられる禎子と室田夫婦とりわけ佐和子との心理バトルは、そりゃ面白いもの。高所恐怖症の私は、とてもこんな絶壁の上に立って下を見下ろすなんてことはできないが、俳優はやはりたいしたもの。久我美子も高千穂ひづるも有馬稲子もそんなコワイところで堂々の演技! また某つり橋の上での佐和子と久子のバトルも絶品モノ。有馬稲子も同様にたいしたものだ。

小説を読んでもこんな美しい風景を頭の中で想像することはなかなかできないが、その点映画は便利。小説では見えにくい古都金沢のまちやうらぶれた能登の漁村の風景が、ホントに実感として見えてくるはずだ。そして自殺の名所「能登金剛」を映す映像の美しさは、白黒映画ながら絶品! 『砂の器』(74年)の映像にも通じる北陸の暗い海の映像はホントにすばらしいものだから十分堪能してほしいものだ。

## 憲一はホントに自殺? それとも誰かに殺されたのでは?

挙式して1週間。古巣の金沢に戻り、残務処理と次期支店長となる本多(穂積隆信)への事務引継を済ませて戻ってくると約束し、東京発金沢行きの列車に乗った夫憲一からは、その後何の連絡もなかった。今のように携帯もなく、情報管理も徹底していない1950年代だから、1日や2日全然連絡が入らなくとも、何か連絡できない事情があるのだろうという心配程度ですませるのが、あの時代の常識……? とは言えないが、搜索願を出すタイミングは難しいもの……。

連絡を絶って1週間も経てば搜索願の提出も当然だし、新妻の禎子が、居ても立ってもいられず金沢支店を訪れたのも当然。ところが、憲一は長年金沢支店長をしていたにもかかわらず、意外にもその部下であった本多たちは、憲一の私生活を全然知らなかったというから、調査は難航。そのうえそんな禎子に対して、能登で変死体が発見されたという情報が警察からもたらされたから、さらに大変。列車とバスを乗り継いで、1人能登の奥にある田舎町を訪れた禎子だったが、彼

女が見た「ホトケ様」は、憲一ではなかったからラッキー……。しかしその後、能登金剛において憲一の遺書が発見され、特別不自然な状況になかったため、憲一は自殺と判断されることに……。しかし憲一はホントに自殺したの？ それとも誰かに殺されたのでは……？

## 憲一の兄も犠牲に……？

憲一の兄鶴原宗太郎を演ずるのは、今は「水戸黄門様俳優」として有名になった西村晃。「出張のついでに」と金沢で禎子が泊まっている旅館にやってきた宗太郎は、弟の憲一が自殺などするはずがないと断言し、独自の調査を開始した。宗太郎がそのように断言するのはそれなりの根拠があったようだが、それは映画を観てのお楽しみに……。ただ禎子がここではじめて知らされたのは、夫の憲一は若い頃に巡査をしていた時期があり、立川署で米軍兵を相手とするパンパンを取り締まる風紀係をしていたという事実だった。そんな禎子がふと思いついたのは、憲一の後任の本多と一緒に憲一の最大の取引先である室田儀作の経営する会社を訪れた時、受付で流暢な英語をしゃべっていた女性田沼久子だった。そんな中、金沢署から宗太郎の妻（沢村貞子）にもたらされたのが、宗太郎が青酸カリで殺害されたという情報。一体誰が？ いよいよ松本清張の推理小説の真骨頂だ。

## 久子も自殺、それとも誰かに殺されたの？

悪いことは重なるもの。宗太郎の死亡に続いて、久子の死体も発見された。そんな時に、自殺の名所能登金剛で発見されたのが、曾根益三郎という、久子の内縁の夫の遺書。この曾根益三郎こそ、実は憲一……？ すると久子の死は……？

謎が謎を呼び、サッパリ訳がわからなくなってくるのが、この段階における松本清張の原作。しかし小説を読んでいる時は、いったん思考を停止して元に戻って考えることも可能。ところが映画はそうはいかないもの。観客はサッパリ訳がわからない状態のはずだが、そんな中、スクリーン上には「1年後」の文字が……。さあここから映画は、謎解きバージョンへと転換し、禎子のすばらしい推理が次々と……。

2006(平成18)年1月5日記